

# 屈折矯正手術・レーシック急速に普及



木下 茂教授  
京都府立医科大学  
眼科学教室

レーシックを主とした屈折矯正手術が急速に普及している。昨年の治療件数は約30~40万件、前年比の倍に増えたとの報告もある。治療の最前線について、木下茂・京都府立医科大学教授(眼科学教室)に聞いた。

## 手術のすべてをコンピュータで自動制御

「レーザーを照射し、角膜を削ることで角膜の屈折力を調整し、網膜に焦点を合わせるようにする手術。ここ数年の技術進歩は目覚ましく、手術のすべてをコンピュータで自動制御する、レーシックが主流になりつつある。

### 技術が進み 精確で緻密

レーシックは角膜にレーザーを照射し、角膜を削ることで角膜の屈折力を調整し、網膜に焦点を合わせるようにする手術。ここ数年の技術進歩は目覚ましく、手術のすべてをコンピュータで自動制御する、レーシックが主流になりつつある。

## 治療件数倍増、推計30~40万件

### 術後の感染症防ぐ新点眼薬も導入

密な手術が可能になりました」

最新機器はレーザー照射器が角膜の中心を自動的に捉え、目の揺れに対応。角膜を削る作業もミクロン単位で自動的に行われる。乱

視のある症例にも対応でき機器も増えています」

一方、術後の角膜感染症を防ぐ新規の点眼薬も導入されています。日本では報告が少なかったが、世界で

た状態で行うが、目は起きている時と違つて少し回旋するので、乱視がある場合には乱視の軸が微妙に変わります。そこで事前検査し

た虹彩を認識して、横臥状態での軸のずれに対応して400万件の手術が行われている中では、非抗酸菌による感染症が問題になつた。この感染症が近年日本でも大きな問題となつた。

「角膜の厚さ、形状などを各人各様。事前検査で適切の可否を見極め、近視度数が強い場合は決して無理りすぎると、眼圧によって角膜が前方に拡張する合併症(角膜拡張症)も報告されている。非常に稀ではあるが、最悪の場合は角膜移植が必要となるため、事前検査が大事だ。

「角膜の厚さ、形状などを各人各様。事前検査で適応の可否を見極め、近視度数が強い場合は決して無理りすぎると、眼圧によって角膜が前方に拡張する合併症(角膜拡張症)も報告されている。非常に稀ではあるが、最悪の場合は角膜移植が必要となるため、事前検査が大事だ。

木下教授は助言する。